

Title	シモンド、ド、シスモンテの生涯
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.5 (1910. 11) ,p.559(59)- 577(77)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101100-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時君主主義は實に孤日落城の悲境に沈淪したるものと云ふ可し。予は過去半世紀間に於て歐洲に起りたる國土の分合、帝王連合事業の價値、フランス、ジョセフ帝、ヴィクトル、エマニエル王、ウイリヤム帝及び其の獨逸に於ける相續者等に付きて茲に喋々せず。左れどヴィクトリヤ女王踐祚の當時に於て、君主主義が如何に其勢力を失墜し居たるか、及び同女王崩御の以前に於て同主義の復興が如何に顯著なりしかを記述するは決して無用に非ずと信ず。但し予は下に於ては單に英國の王位に付いてのみ論述せんとす。千八百三十七年ヴィクトリヤ女王踐祚の時に當りては英國の王位は實際殘燈明滅の甚だしきには至らざるも、少くも不安の状態にありしは事實なり。女皇は斯かる危急存亡の時に於て王位を繼承したるを以て國民の同情は自然に之に趨けり。即位の初期に於ては女王は賢明なるレオポルド王、及び忠誠聰慧なるメルボーン卿の指導を受けたりしが、千八百四十年大婚の事あるに及びて、女王の御宇中最も困難

なる時代の幕は開かれたり。一方に於て王配は偏狹にして英國の政務に關して過渡の干渉をなすものなりとの疑を受けたると同時に、他方に於て女王は女性の特色を發揮して王配の識量に信賴し、彼の尊嚴を維持せんが爲めに焦慮せしが爲め、却て王者の器に非ずとの誹謗を受くるに至れり。左れど千八百六十年王配薨去の事あるや、女王は全國民より深厚なる同情を受けたり。之れ女王が同様の境遇にあるものに對して常に衷心より憐愍の情を垂れ給ひしによる。斯て全國民は哀悼の念に充さるゝと同時に、亦悔恨の感に耐へざるものありき。蓋國民は從來王配を誤解したるを以て、此の機に於て其の過を懺悔せんと試みたればなり。吾等今は能く王配の眞意を知る。偏狹なる厭嫌の念は全く閉息せり。王配既になし。想へば其如何に賢明にして加かも謙讓仁慈に涉らせ給ひし事よ。克己自制の美德に富ませられ、舉止溫厚造次にも顛沛にも其度を逾へ給はず、毫も黨争の渦中に入らせらるゝ事もなく、其高位を利

用して私慾を充さんとし給ふこともなく、又徒らに快樂に耽らんが爲めに一步と雖も其權域を越え給ふ事なかりき。(未完)

シモンド、ド、シスモンヂ
の生涯

高橋誠一郎

(九)

眼の巨きい、色の黒い、反齒で、然も大顔な、絶代の才媛ステール夫人は深くシスモンヂの心を酔はしめた。彼女の黒い瞳が天才の光に輝いて濃い眉根を動し長く垂れた頭髮に波を打せて間斷なく圓轉流麗の辯舌を弄した時、彼女の醜貌は何時しか花の如く美しく暉き渡つた。シスモンヂは彼女が一千八百十七年七月十四日五十一歳を以て巴里に逝くの日に至るまで變らぬ友情を寄せて居つた。

ステール夫人が一千八百〇四年四月九日を以て冥黙した其偉大なる父に對する追想の筆(Du Carrière de M. Necker)を擲つてアウグスト、シユレール、ヴキルヘルム、フォン、フンボルト及びカール、オクトル、フォン、ボンステッテン等と共に伊太利の旅に赴いた時、シスモンヂも亦一行中に加はつた。此旅行は纏て夫人の名作コリン(Corinne ou l'Italie)と爲つて全歐の喝采を博せしむると共に、シスモンヂに取りては當時の伊太利に於ける第一流の人士と普く相識るの機會を得ることと爲つた。然も細心な彼の母は一面に於て幾多の利益を其愛兒に與ふ可き此ステール夫人との道伴れを喜ぶと共に、他面に於ては甚しく不安の念に襲はれた。彼女は幾種か繰り返して、啻にシヤールの弱點のみならず、其同伴たる才媛の缺點をも舉げて愛息を深く戒むることを怠らなかつた。

彼女は云ふ「噫、然らば御身はステール夫人と共に旅立ちせんとするにや。御身が彼女の如き道

伴れを得たるは幸福に過ぎたりと申す可く候。遮莫、戒心し給へ。旅行は短き結婚と等しきものにて候ぞ。人は常住共に在る時は互に相手の人物を知悉し過ぐるものに候。相互の缺點は残る限なく知れ渡りて毫も之を蔽ひ隠す可き餘地存せざるなり。彼女の如き天然の寵兒、世間の流行兒は必ず毎朝疲れ惱める風情を示すなる可し。而して妾は深く愛せるものが僅に一の缺點の爲めに俄に嫌惡の情を生じて其愛人を避くるに至ることあるを知れり。されば人は大なる注意を以て自己の缺點を見んことを努むると共に、其同伴の缺點に對して堅く眼を閉づることを忘る可からずと存じ候。妾はステール夫人が如何にして彼國の交際社會に名聲を博したるやを怪むものにてこれ有り候。疑もなく彼女は佛蘭西語を理解し得るもののみ、特別の懇親を結び得たるなる可し。即ち彼女は其思想を伊太利語もて發表し得るや。そは恐らくは彼女の爲し得ざる所なる可し。假令彼女が能く伊太利語を理解し知悉し且つ其國人の三分の二よりも却

つて能くダンテを讀み得可しとするも、然も遂に伊太利語もて其意のまゝに流暢なる會話を行ふの途を知らざる可し。意見と思想との未だ生せざる時、言葉は如何にして其國語中に見出され得可きや。試みに見よ、彼女は伊太利語の韻律をも好まざる可し。遮莫、彼女は常に嘆賞せられて其周圍に狂熱 (Craze fanatique) を興さしむるなる可し。云々。

然しながらシスモンチは訓戒の眞意を充分に味ふことが出来なかつた。彼は皆に文字通りに之を讀過して其返書を認めた。即ちシャルルが羅馬より母に宛てた書中には「ステール夫人は其到る處に人々を喜ばしめつゝあり。然れども自己を喜ばしむ可き何物をも發見すること能はず。彼女は此美しく響く國語が何事をも言ひ表さざるに失望しつゝあり。伊太利人が彼女に對して誇りつゝある詩歌の裡には彼女は何等の理想をも見出すこと能はず、而して又其對話中には何等の情緒をも發見すること能はざるなり」と云つて居る。

ステール夫人は一千八百〇五年七月再びコッペに歸つたが、更に一千八百〇七年の終りに獨逸に再遊を試みることを爲つた。此稀世の才女は是等の旅行に由つて外國文學の光彩ある繪畫を稽ねて、纏て時人の眼前に清新にして大膽なる意見を公にせんとしつゝあるのである。而してシスモンチも亦一ヶ年間書齋の裡に在つて心身を擧げて述作に傾注した後に、復もステール夫人に伴はれて再び世界の人と爲つたのである。

ステール夫人は此獨逸の旅行に際して彼女の所謂「其名聲の先づ知れ渡つた新歴史家」を「あらゆる人」に紹介するを最も楽しんで居つた。シスモンチは並ならぬ親切な待遇を受けて維納なるステール夫人の邸宅に寄寓して居つた。彼は最も典雅な作法と華やかな會話を以て顯れた此第一流の交際社會の中心に入ること許されたのである。彼は獨逸や露亞西の皇女、公爵、伯爵及び廷臣等と共に舞踏を演じた。彼の寄寓しつゝある此有名な女主人の開く月曜日の晚餐には當時此都會の有す

る才能や地位の卓越したあらゆる人物を悉く吸収するに出來た。シスモンチは古くマリア、テレザの時代からヨセフや、レオホルドやフランシスの歴朝に奉仕して頭髮白く老衰の極に達した高等官を目の當り見た。彼等は鋭敏で、才能にも不足なく、自由主義の傾向を有しながら、唯だ習慣的に其君主に附隨してゐるのである。彼等は今や全く、判断を缺き、意志を缺き先見の明を缺き、政府の窮狀に喪心して唯だ無爲の惰眠を貧りつゝあるものである。彼は奥國の財政が紊亂の極に達し政治百般の機關は悉く皆弛廢の頂點に達して居ることを見た。略言すれば新思潮に對して舊思想を擁護し、其周圍に高尚な同情を集めんとして自らナポレオンの武斷的獨裁政治に對する敵手たることを標榜しつゝある此帝國は今や崩壞分裂せんとするの悲境に立てるものとして彼の眼に映じた。是れ實に萬般の權力が悉く帝王一個の手に在るが爲めである。而して其手が全く癱痺してゐるが爲めである。

其紙幣に關する記録(Memoire sur le Papier Monnaie)に據つて見るとシスモンデは一時彼が親しく聞知した失政中最大なる害毒を流しつゝあるものに對して救済の道を與へんと試みたことが明白である。此害毒は其當時國家の財政並に私有財産の混亂破壊と爲つて社會のあらゆる階級に及んでゐる。此論稿は更に好機會を得るに至る迄は出版せられなかつたがシスモンデは其内に「價値の變動少なきとを以て主要なる特性と爲せる通貨は元來其性質として變動多き信用の産物たる可きものでない。信用の目的とする所は價値の貸借及び移轉であつて、決して價値を創造し得可きものではない。價値を創造する力は獨り労働に屬するのみである」と道破してゐる。「假設的なる虚偽の價値を有するに過ぎない紙幣から貨幣の全部が構成せられて居るとの最大なる缺陷は、國內に於けるあらゆる眞の價値を破壊し、此不正の尺度に由つて計量せられざらんが爲めに消滅せしむるに至るとである」と聲明し、而して彼は更に此幣政の紊亂

から流出する千萬無量の弊害を指摘して「商業は投機賣買の爲めに致命の大打撃を受け、労働及び産業に對する正當の報酬は、運賦天賦の賭戯と爲り、活動は失敗を招くの因にして、却つて安樂靜穩の境遇は懶惰無爲の効果たるの觀を來すのである。公共的慈善事業は社會一般に互れる窮乏の爲めに全く行はれざるに至り、浪費、放蕩に耽るも穴勝ち其愚を嗤ふこと能はず。斯くて遂に法規其物は則ち社會を破壊するの病患たるに至るものである」と云つてゐる。

這箇幾多の害毒を列擧した後、彼は其救済方法を示してゐる。普く秩序を恢復し經濟界の基礎を鞏固ならしめんが爲めに施す可き唯一の救済策は獨り紙幣の廢止あるのみである。強制證券の流通は永續的の破産であることが明瞭と爲つた其瞬間から一般民衆の苦痛を感ずるのは紙幣の消滅空亡にあらずして其の價値の下落である。故に須く紙幣廢止の荒療治を斷行して早く人民の苦痛を去らしめなければならぬ。シスモンデは又紙幣廢止より

生ずる大激動が其勢を緩和せらる可き幾多の隠れたる原因を發見することを怠らなかつた。彼は紙幣は其轉々授受せらるゝこと頻繁なるが爲めに、其激動より生ずる損害は比較的平等に分擔せらるゝ「非常特別税」と爲るのであると稱してゐる。循環流通の急速、損失の重複は少くとも該證券が全く流通を見ざるに至つた時之を平等に配分し洽く各人の間に之を分つて其激動を減殺するの利益あるものである。

此主張はリーニエ公の熱心なる賛成を得、奧太利並に等しく紙幣國たる露西亞の閣僚等の間に考究討議せられて多大の賞讃を博し、ヨハン及びカールにの二大公爵に捧呈せられ、レニエア大公爵の嘉納を得、其手寫は皇帝の乙夜の覽に供せられ、廳でグイマールで印刷せられることに爲つた。シスモンデの此論文は一時商業界の景氣を引立たせる程の勢であつたが、然も事實上此重大問題に注意を拂つて誠心誠意社會の利益の爲めに努力したと云ふ深い満足を其著者に與へた外何等の効果を表

さなかつた。恂々乎として自惑自失せる奧太利は瑣末なる改革をも斷行するの勇氣を缺いて居つた。彼は唯だ喘々焉としてナポレオンの劍を待ちつゝあるものゝ如くである。

(十)

丁度其頃ステール夫人が有名なド、ラルレマン(Du l'Allemagne)を書く用意として(此書が完成したのは一千八百十年の事で宛も其原稿の半ば印刷を終へた時、復もナポレオンの忌諱に觸れがて此未成の印刷物は沒收絶板の災厄に遭遇したのみならず、彼女自身も亦巴里を追放せられてコッペルに移ると爲つたが、其後一千八百十三年終に倫敦に於てジョン、ミューラーの手に出版せらるる事と爲つた)獨逸民族の風俗習慣政治文學の實境を知らんと欲し此國土の産したる大著述並に其當時に於ける著名の士と親まんとして居つたが之と同時にシスモンデは又南歐の文學に就きて同じく研究に耽つて居つた。彼はジェネローで一千八百十一年の末から十二年に掛けて此問題に就いて

引き次ぎ公開の講演を開催して絶大の成功を贏ち得たのみならず、更に後年の名著に對して主たる資料を供すること爲つた。南歐文學論(Littérature du Midi de l'Europe)の著は一千八百十三年伊太利に於て其筆を運び、ツロイデル及びヴルツの手に出版せられた。佛蘭西、伊太利、西班牙及び葡萄牙の文學は孰れも一種の親族關係を成すもので互に相接近した郷土の産物である、而して其國語は皆等しく羅典の本源より分岐し、異つた時代、異つた四圍の事情の下にそれ／＼特殊の發達を爲し、其著作中には中世紀に於ける連續した時代の世相を表しつゝあるのである。是等諸國の文學はシスモンヂの該博透徹の見解を以て其外觀の類似と其天才の特技とは如何なる程度までが彼等の獨創で如何なる程度まで他の助力を借りたるのであるかを精細に區劃した。

シモンド、ド、シスモンヂは如何なる態度を以て文學を研究したか。彼は文學を以て實際社會から分離した特殊の産物と見ることが出来なかつた。

彼は厭く迄時代世相を本位として之を觀察した。シスモンヂは獨り靜に南歐の文學に親むを快としたのみならず、久しく世上に顧みられなかつた這般の文學を再び世間に紹介するを以て深き慰安を感じて居つた。彼は多數の斷片を引用し、之に巧妙なる分析を試みた。而して彼は特に一々之を産した國民の政治史並に宗教史と結び附けて其間に存する關係を考察した。智性、就中殊に想像力と云ふが如き他より何等の援助を借らず、全然それ自身の力のみで依頼せるが如き觀ある能力の發動に基いた製作が實は國民の社會的狀態並に國民智力の一般的條件に従つて進歩か、衰滅か、將た富贍な獨創と爲るか、枯渴した模倣となるかのと云ふ嚴然たる法則に支配せられて居ることを闡明するのが彼の目的である。文學は其國家が富強の極點に達し、其國民性が最も完全なる發達を期けた時に最も陸離たる光彩を放つるもので、國家が衰滅の域に向ひて其國民性が墮放つると共に次第に退歩の徴を示すものであるとの事實を彼は吾人に教

へてゐる。大詩人は國民の想像力の代表者と看る可きものである。宛もあらゆる人の心胸に存在するものゝ外何等の大思想も存在するものでないと等しく彼等大詩人は其時代に於いて想像力を刺激するあらゆるものゝ外、何等饒かなる神來の靈感を受くることのないものであるとは彼が此興味ある著書の内に道破した所である。

(十一)

シモンド、ド、シスモンヂが四卷より成る其講演集を出版せんが爲めに初めて佛都巴里を訪れたのは一千八百十三年の初めであつた。彼は此地に於て幾多知名の士と親しく交際することを得たのみならず、長く友情の變らない知己をも得たのである。然しながら其當時には一般の人心は殆ど文學や藝術の問題を顧みなかつた。最近に起つた甚大の禍難に激動した民心は常に戦々競々として須臾も安んずる所なく、國家の將來は暗黒なる危懼鬼胎の影に包まれて居つた。到底彼等の胸裡には文學を味ふの閑日月は存在しなかつたのであ

る。果然幾干ならずして帝政は終を告げた。而して帝國領地の一部に併合せられて居つた彼の郷土ジエニールは昔の獨立を恢復した。シスモンヂは新瑞西共和政府建設の任に當つた立憲會議(Assemblée constituante helvétique)の議員に選任せられて其改造の業を助け、之を完成せんことに熱中した。然しながら邦家の再興、平和の克復に由つて喚起せられた歡喜の情は永く持續することが出来なかつた。彼は同盟諸強の帝王が其戰捷の餘力を妄用するを見て心外に堪えなかつた。歐羅巴には領土及人民に對する任意專擅の分配行はれて、毫も正理に法るなく、民意を尊重することなく、佛蘭西には獨斷的な反動の精神が勃興して再び革命前の状態に復歸せんとしてゐる。此を見彼を耳にしたシスモンヂは深い憂愁の情と不信の念に其心胸を滿すに至つた。

斯くて一千八百十五年ナポレオンがエルバ島を脱して一の障害なく一の戰鬪なく悠々として再びチヌーレリー王宮の人となつた時、當時宛も巴里

に滞在して居つたシスモンデは彼ナポレオン其人に於て人民を代表して戦へる勝士、今まで危機に瀕して居つた革命の主義及び其成果の擁護者、其意思其自由は歐洲各國の主権者をして尊重せしむ可き一大國民の正統なる代表者として而して又彼が四月二十一日に發表し五月の國民會議 (Camp de Mai) を通過せしめた帝國憲法追加法 (L'Acte Additionnel) の制定後に在つては佛蘭西國が未だ曾て有せざりし最も完全なる憲法の立案者を見たのである。最近まで彼が滿々たる野心と權力の濫用とを難じて居つたシスモンデは今や俄然其論調を改めて其所論に前後の矛盾を生ずるをも顧慮する事なく公々然と彼の味方とは爲つたのである。ナポレオンの三月二十日の上陸並に其急速の發展はあらゆる事物に新生面を與へた。ブールボン王朝が所謂「其自負倨傲の爲めに十ヶ月間に失敗の限りを盡し、其懦弱無力の爲めに十日間に失敗の限りを盡した」實況を親しく聞睹したシスモンデは今や「篡奪者」の首に賞金を懸けた勅令の側

に樹てられた皇帝の宣言を讀んだのである。彼は一般人民の痛苦を救はんが爲めに封建の君侯に對して挑戦した。自由民權の大主義を眞甲に振りかざして同盟諸國を粉砕した。而して彼が自由民權の思想を棄てた時、人民は亦彼を捨てた。斯くて彼は苦いエルバの經驗を嘗めたのである、然も革命の兒は終に革命の主義を捨て、去ることは出来ぬ、彼ナポレオンは其再び帝位に歸ると共に、復も慈母の懷に其身を投げたのである。シスモンデは「ナポレオンが王權的同盟の勢力微弱にして復た之に媚ぶるの要なきことを明々白々に證明した」ことを認めた。而して彼がブールボン王宮より發したる、一は奴隸賣買禁止に關し、一は出版自由の設定に關する二勅令は正に這個の希望を確證するが如き觀があつた。一度道を讓ることを餘議なくせられた力は再び之を元の道に歸らしむることは殆ど不可能である。新に蒔き直しをやるよりは之を改良して促進せしめた方が得策である。此時代に於ける最も恐る可き危険は列強の銃劍と

第二の反動であることを深く感得したシスモンデは細く立入つて瑣末の問題や内部行政の問題を討議するを暫く中止して佛國國旗の周圍に舉國一致の愛國心を喚起するの急務なることを覺知した。彼は官報 (Moniteur) 及び其他の紙上に佛國憲法評論 (Examen de la Constitution Française) 以下數篇の論稿を投じて皇帝の主張及び行動に關して有力なる後援を與へたのである。是等の論文は徒らに熱烈の言を弄しては居らぬが然も其透徹なる推理の力は大なる感動を佛國民の上に與へたのである、彼は追加法が大臣の責任を規定し、終身官たる治安判事及び民間より選任した陪審官の制を確立して司法權の獨立を得せしめ、最後に出版の自由並に其他あらゆる自由を鞏固ならしむるの保證を與へて臣民の權利を確保したるを賞揚し、他方に在つて同法は代議士の數を増加し普く一般の佛國民に被選資格を與へ、以て人類の享得し得る最高貴なる訓練たる參政權を全人民に附與することを約定したものであると聲明した。

彼の如く公明正大なる心胸を有するもの、純潔なる唇より斯くの如き後援の言を得やうとは流石にナポレオンも豫期しなかつた所であらう。彼はシスモンデに其満足の表章を與へんことを希望しレジヨン、オフ、オーナトの十字章を贈らんことを申出たが清廉なる彼は嚴く拒んで受けなかつた、名利に恬淡な彼の態度は一層ナポレオンの心に尊敬の念を生せしめたものと見えて皇帝は彼をエリゼエ宮に招じて親しく其復位、其地位、其計畫より歐羅巴各民族の性情、革命の諸主義及び各種の政體に至るまで最も卒直に最も明確に譚つた。此稀世の英傑との長時に亙る對話の次第は直ちに録して其備忘録中に挿入せられた。左に譯出する所のものは即ち是である。

(十二)

『予が既に佛國憲法に關する二論文を官報紙上に掲げたる後のことなりき。五月一日ベルツロンド將軍は手簡を予に寄せて、翌火曜日午前十時に來訪を得たき旨を申越せり。翌朝申越の時

間より數分時遅延して彼を訪問せしに宛も外出したる後なりき、予は止むなく正午まで彼を待てり。纏て歸り來りたる彼は予に語るに皇帝陛下が官報紙上に予の論文を閲讀せられて深く満足を感じられしこと、竝に予を陛下に謁見せしめんことを希望する旨を以てせり。彼更に予に談りて言ふ、『陛下は御身の曩に出版せられたる著書數編を予と共に繙讀し給へり。而して陛下は御身の如く頗る卓越したる人物の知己と爲るを喜び給ふなる可し』。予は彼等君臣が相俱に予の著書を披見せしはエルバ島の配所に於てなりしならんと思ひしが、彼は其より尙ほ以前のことなりきと曰へり。斯くて彼は謁見の日として翌五月三日(水曜日)午前十時を約せり。翌朝予はエリゼエ宮なる將軍の官房を訪れたり。刺は通せられぬ。而して一人の歩兵は直ちに予を導きて宏大なる廊に入れり。是れ即ち皇帝の引見室控間に供せられたるものなり。

待つ間もなく將軍出で來りて、暫く此所に在

謂ひて予に帽子を戴かしめ、相携へていと廣やかなる辛夷の園徑に歩を移しぬ。此所に予等は且つ語り、且つ歩みて凡そ四十五分間の時を消しぬ。予は語を次ぎて曰ふ『予は此眞に自由の基礎の上に築かれたる憲法が斯かる不評と無知の喧噪とを以て迎へられたるを遺憾とす』。皇帝『然れども予は此不評の聲も漸次に薄らぎ行く可きを豫期するなり。予の自治區に對して發したる勅令竝に各選舉會の議長等は孰れも必ず良好なる結果を得るに資するなる可し。尙ほ此國民を見られよ。彼等は要するに未だ斯くの如き思想を味ひ得るまでに成熟せざるなり。彼等は予が會議解散の權を物論するも。然も後日若し予が銃劍の力に訴へて之を退散せしめんか、彼等は却つて之を自然なりと思惟するならん』。予對へて曰ふ『予が最も痛嘆に堪えざるは彼等が陛下の改策の正に變化したることを洞見すること能はざること是なり。今や陛下は革命の代表者自由思想の與黨と爲り給へるなり。陛下は昨

りて休憩す可き旨を告げたり。予が平服に一口の短劍を佩けるを見て、彼は之を脱す可きを勧めたり。半時ばかりにして戸は開きて、予は引見室に招せられたり。皇帝は數名の將官竝に副官を從へて室内に在り。予は其中にフロオ將軍及びラベドイエア等を認めたり。陛下は即時次室に入りて更に其所より予を招けり。『御身の姓名は御身の伊太利人なることを示せり。』と皇帝は曰ふ。『シスモンデ氏よ、然るに御身はジエニヅの出身なりと云ふにあらずや』予は乃ち予の祖先に就きて譚れり。皇帝更に曰ふ『予は大なる感興を以て御身の著書を讀めり。殊に御身が最近我が憲法に就きて論じたる者に於て大なる興味を覺えたり』。陛下、予は予が論文の陛下の推賞を辱おせるとを感謝す。然も其論たる唯だ予が所思を卒直に告白せるに過ぎず、眞に予は今回の憲法を以て從來佛蘭西國に與へられたる諸憲章中最も善美なるものとして嘆美しつゝあるなり』。此時皇帝は『いざ俱に庭園に赴かん』と

年中に皇權同盟の微弱なる事、竝に陛下が嘗て依頼し保護を加へ給へるもの、不信反感によりて苦き經驗を嘗め給へり。而して是が爲めに陛下は唯だ頼む可きは自由の黨與なり、佛國にても將た又全歐を通じても陛下に取りて忠實なる同盟者は單に之のみなりとの信念に對し最早一點の疑團をも有し給はざる可し』。皇帝曰く『正に然り、予は痛切に之を感じ、而して予は爾後永く此信念を去ることなかる可きを誓ふ。人民は這般の事實を最も好く感得せり。而して假令御身等の如き人々の解するが如く確然たる主義として之を抱持したるに非ざるも、實際に於て予は此迄革命の法則より予が施政の方針を離れしむることをなさざりしが故に、彼等人民は予に對して恒に好意を捧げつゝあるなり。予は當時他の希望、予の熱中せる大企圖を有したりしを以て、萬事悉く革命の法則に法ること能はざりしと雖も、予は從來之を裁判の公平、租税の平等竝に住居移轉の自由等に適用したり。這

般の施設は孰れも農民階級が長く其恩恵に浴しつゝある所にして、又以て予が彼等の間に好評なる所以なり。遮莫、佛國民は主義法則を見ること萬事極端に過ぎたり。彼等はそれを總て佛國民特有の熱烈 (La furia Francese) を以て判断するなり。彼等に常に狐疑し、猜忌す。彼等と比較する時は英國國民は遙に反省心に富む。彼等の思想は凡て這個の問題に成熟せり。殆どあらゆる英國國民の抱懐せる思想は皆悉く公平穩健なり。予はエルバ島に在りて英國人と接觸するの機會を得て殊に斯かる感を深うせり。多くは皆不法にして其容姿も亦無下に卑しく、予が客室に入るの作法とても知らざりしが、然も一度彼等と對談するに及びて、其粗野なる外貌の裡には思想正しく深遠にして且つ中庸を失はざる成熟したる人格を發見したり。

予は皇帝の識れる幾多の英國人に就きて問ひ試みたり。彼は深くドーグラス氏の人物を喜び、新聞紙上に過激なる議論を公表したると同一人

物なりとは信する能はざりしと云へり。ポーランド夫人に就きては未だ一面の識なきも同夫人の彼に對する熱情は好く之を知れり。予は彼に英國財界の窘迫せると、人心恟々として安んずる時なきこと、並にセー氏の小論文に就きて譚れり。總て英國國民との對比より轉じて予等の話題は再び佛蘭西國民の上に歸れり。皇帝曰ふ「遮莫、佛國民は華やかなる國民なり。彼等は氣高くして感情鋭く、常に何にてもあれ、華麗雄大なる事業を企圖せんとしつゝあるなり。例へて謂はんに此回の予がエルバ島よりの復歸に勝りて、更に華やかなるもの又あり得可きや。さなり、予が此回の舉は唯だ佛國民の本性を洞察し事の結果を豫知したる外何等の功績とてはあらざるなり」予は彼の復歸に關して幾多の質問を試みたり。彼は之に對して悉く謙讓の辭を以て答へたり。彼曰く「共謀結黨するものありて、萬事皆豫め陰密に用意を整へたりと思惟せらるゝも、それは悉く根據なき想像に過ぎず。予は秘

密を他に漏して事を破るの危険を慮り。毫も他に之を通せざりしと雖も、然も予は正に斷行の時機到來せることを洞見せるなり。予答へて曰ふ「爾來常に革命は軍隊の力に由りて行はれたる事業なりと稱せらるゝと雖も、予は農民階級が之に比して優るとも劣らざる敏活を以て革命の業を助けつゝあるを信せざるを得ざるなり」
 『洵にそは疑もなき事實なり。予は五十里に餘る行程に於て一人の兵士にも遭遇せざりしなり。予に會はんとて來る者は唯だ農夫のみ。彼等は其妻子と共に快き鄙唄を歌ひ伴れつゝ予に従ひ來るなり。彼等は時宜に適へる歌曲を作りて、予の徳を頌し、元老院を詈し其無道を呪へり。予がデイニーに近きたる時其住民等は自治區の政廳を強要して予に來り會せしめたり。そは元と予に敵意を有し居りしも、然も事は總て好都合に運びて、予は既にデイニーに於て絶對無限の權力を有する君主と爲れり。予は此地に於て意のままに二百の人を絞罪に處することをも得

可かりしなり。彼等住民は切に予の袖に縋りて此自治區に止らんとを勧めたり、然れども予は只管前進せんことを望みたり。一轉瞬の間と雖も、予は徒らに之を空費すること能はざりしなり。デイニーの町より山嶽は聳え立てり、予は全住民を従へて之を登れり。而して予が野陣を布くや、彼等は警吏、休職軍人其他同地方に於けるありとあらゆる著名の人物を陸續と予に送れり。予は時に未だ一軍隊にも遭遇することあらざりしと雖も、然も予は欲するがまゝに全住民をも悉く従ふことをも得たりしなり」
 予等の話頭は再び轉回して憲法の上に移れり。彼は曩に謂へる終身選舉會は必ず適度に貴族的分子を輸入混化することを得可しと思惟する旨を述べたり。予は正に一定の限度に於て貴族的分子の必要不可缺なること、及び社會上に於ける現在の利害を代表すると共に、永續的利害も亦等しく代表せられざる可らざる旨を談れり。彼之に對へて曰く「國家を統治するは尙ほ航海

の如きか、舟航は必ず二要素を必要とするが如く、國家て亦船を遣る亦二個の要素を必要とするなり。輕氣球は決して一定の方向に之を運行せしむること能はず、即ち單に風の方向に従ひて進むのみにして、之を制す可き機關備らざるが爲めなり。純然たる民主政治に在りても亦多少貴族的分子を結合せしむるにあらざれば全く之を指導すること能はざるなり。一は以て他と相同じからず、兩々相反せる別箇の感情に由りて國家の船體は克く方向を定むることを得るなり』予の曰く『予は絶對に貴族的要素の必要を感じず。加之予は自然の本性に基く感情と調和せる世襲的區分をも亦尊重するものなり。這般の區分は寔に國家が益々自由に赴くに伴ひ、而して又家族の名譽が次第に國家の名譽と結合一致するに至ると共に愈々貴重と爲る可き性質のものなり。然りと雖も目下陛下が蓬著し給へる情況に在りては、予は立論の頗る困難なるを惟はずんばならず、而して予は如何にせば貴族

院をして其缺損せる這般の思慮を得せしむるを得可きやを知らざるなり。陛下は曾て新貴族を以て舊貴族と混化するの策を探りて成功し給へり。然も斯くの如き方策は予の信する所に據れば今や之を行ふに由なる可し。舊貴族は明かに敵意を挾むものなり。予は陛下が現今之を陛下の行政部に入らしむるとを得可しとも亦之を入らしむ可きものなりとも信すること能はざるなり。而して予は又克く新貴族をして舊貴族に對抗せしむるの道をも知らざるなり』洵に今に在りて混化融合の計畫は總て皆之を見合はざる可らず。斯かる結合は恐らく不可能のことたるならん』然らば世襲的なる貴族的分子に代ゆるに選舉に由れる貴族的分子を以てせられんとを予は陛下に望むなり』御身は如何にして之を行はんとするや』愚案に據れば新貴族を敘任するの權限を陛下の手に留保するも、然も缺員を生ずるに及びて選舉に依りて之を補充するの權限を貴族院に委せらるゝに在り』否、否、そ

は可能のこととも覺えず。そは必然當初數年間の時日を要するなる可し。予は是等の憐む可き貴族等に同情す。彼等は必ず幾多の反對と嫉視とに遭遇せざるを得ざるならん。されど、數年の後には人は之に慣れ、舊貴族は再び貴族院に入りて、終には自然の秩序たるが如くに見ゆるに至る可し』。

彼は次で伊太利に就きて予に談れり。彼言ふ『彼等も亦華やかなる人民なり。彼等は統一せる一國民を構成す可き要素を具備せり。予は彼等の爲めに力を注ぎたり。予は彼等の間に缺如せる軍事的思想並に國民的感情を鼓吹するに努めたり。彼等は當時頗る良好なる發育を爲しつゝ、ありき。而して今や甚しく不幸の状態に在るなり』寔に陛下は彼等をして好軍人たらしめ給へることを予は信するなり』さなり、彼等は佛國民にも劣らざる程勇敢なり。彼等は佛人と等しく砲火の下に立ちて精銳にして、規律を確守する點も亦相同じ』予は客年ミラー將軍が陛下

に對して叛旗を掲げたる時、宛も伊太利に在りき』噫、彼は當時如何なる態度を取りしや。あの横道者が』陛下、若し彼にして頗る敏活に二萬の佛國人の生命財産を保護救濟するに非ざりせば彼等は終に虐殺掠奪の憂き目を免るゝこと能はざりしなる可し。此點に於て吾人は彼の態度を賞讃せざるを得ざるなり』さなり、單に彼を分疏し得るは此一事あるのみ』陛下、予は他に尙ほ彼を辯疏す可き事實ありと考ふるなり。即ち彼が事を起せる順序並に其齟齬の状を見るに予は彼が密かに陛下に心を寄せ、唯だ時機の到るを待ちつゝ、在しものなると吾人の疑はざる所なり』否、否、決してさることあるにあらず。今尙ほ彼は時節遅れの大局論見を立て、復も愚舉を演じたるなり』然らば彼は撃破せられたるにや』否、彼はチスネにて多少の勝利を贏ち得たり、然れども結局退却せざること得ざるに至れり。彼は應に其精銳なる軍隊を率ゐて境界を固めて防禦を爲す可し。彼が兵力は未だ精確に

算定せらるゝ事を得ず。従つて之を攻撃するとを躊躇しつゝある次第なるが、彼にして若し前進せば其實力の範圍は直ちに明瞭と爲るに至る可し。『彼に味方して蜂起する者はあらざるか』『少しは斯くの如きこともありしが。彼は之に武装を施すの途を有せざるなり。彼は更に兵器の貯へなし。平和の年なりしならんには、殊に彼は英吉利と自由貿易を行ひつゝありしが故に、十萬の小銃を購入する事もさまで困難に非ざりしなる可し。遮莫今日の有様にては伊太利人は如何とも爲す事能はざるなり。伊太利人等は是迄予に對して陳言を爲し、絶えずエルバ島に懇請の書を寄せつゝありしなり。然れ共予は常に之に答へて、御身等は暫く沈黙を守らざる可らず、御身等の爲めに施す可きの策なきなりと言ひ送れり。寔に佛蘭西に在りてこそ、軍隊と人民とを得るに不足なく、あらゆる砲兵工廠も、あらゆる軍器廠も、あらゆる要塞城壁も立ち所に吾が手に入る可しと雖も、然も、如何に伊太利が我

に好意を有すればとて、アレキサンドリアやマンチュアは其造兵廠と共に必ず伊太利人の手に残るなる可し。加之、國民の間に在りて最も有望あり、其國民的運動の先頭に立つ可き人々は悉く皆逮捕せられたり。』『そは如何にして宛も伊太利に入らんとしつゝありしベリー公の名を以て彼を佛蘭西黨の主領に推して事を擧げんとせる密謀の飛檄は彼等に提示せられたり。此事たる元より虚妄の作事にして公は何事も之に就きて聞知する所あらざりしなり。然れ共有志家等はおぞくも陥穽に落入れり。彼等を騙陥したる者は其姓名をベレガーデ將軍に密告せり。將軍は直ちに彼等を逮捕せしめたるなり。』予は他の伊太利諸州に比してタスカニーは最も革命に傾くと少きが如く感ずる旨を彼に談れり。彼曰く『そは初めよりして然りしなり。然れ共今や彼等は佛國の裁判所を追惜し、法典の廢止を怨むに至れり。先きの日彼等は大公爵に従ひてピザに赴き、彼に言ひけるは「然れども殿下よ、聞し

召せ、事々物々悉く皆非なり。這般の變革は皆無用なり。吾人は是等前時代の法制や租税や斯くの如く馬鹿々々しきものを最早有することなかる可し。』(Ma non sia bene, Altezza Reale, tutta quella mutazione: non vogliamo più quelle leggi antiche, ne que' dicelli, ne tante stravaganze)と。斯く談りたる彼の伊太利語は頗る流暢にしてアクセントも亦正しかりき。予は之より瑞西に就きて彼に譚り、其永久中立は予が眼には頗る重要なものとして映ずる旨を述べたり。予は官報に一論文を送りたるも、未だ掲載せられざる由を述べたるに、彼は之を一讀し、併せて紙上に掲載せしむ可きことを約せり。予は瑞西にして其中立を維持せんことを希望せば、そは長く破却せられざる可きものなるやを彼に問へり。彼は瑞西諸州の態度を如何に考ふるやを予に反問せり。予は之に對して、新しき諸州は佛國に好意を表しつゝあり、貴族的なる諸州にては、政府は甚しく彼に反對なるも、然も人民は深く

昨年の政變を遺憾としつゝあり、而して小き諸州は全く彼の敵なる由を答へたり。彼曰く『之を要するに人民の多數は仲裁法を追惜しつゝあるなり。而して予は同法に依りて予が佛國にて行ひたると等しき革命を瑞西にても喚起することを得たりしなり。』彼は吾人がジエニローにて自己の憲法を喜びつゝあるやを問へり。予は其主義として採れる所のものに頗る惡しきも然も其實際上に於ける運用は決して惡しきにあらず、而して吾人は吾人の獨立を維持するに大に努めつゝある旨を述べたり。彼曰く『ジエニロー人は聰明なる精神と自由の習慣とを有するものなるが、然も、さあらんには此地に建設せられたるは世襲的貴族政治にあらずや』と。予は遽に吾が共和政府憲法の思想に就て説明を加へたり。此問題に就きて彼は予にジャン、ジャック、ルソーのことを談り、彼は甚だしくルソーを好まず、其所論の内には幾多の虚偽を發見す可く其筆致は須臾誇張に過ぐるもの

あるを述べたり。予はルソーが現代の文豪シヤトーブリアンに酷似せることを述べ、其文體は光彩に富むも簡頸を缺ける旨を談れり。彼曰く『然り、彼は感動を與ふるを以て目的とす、人は彼の字句に魅せらるゝと共に、其下に潜める思想は毫も成熟せるものにあらざるを感ずるなり予は未だ「基督教の特質」(Genie du Christianisme)の全部を通讀したることなし、そは予に取て趣味なき問題にして、又予の信せざる主義教理なり、然れども例へば彼が予を攻撃したる文字を見るに、其内には何等の思想なく何等の定見なく唯だ感情に訴ふるのみ。遮莫、彼は正しく才能の人たる也』予は彼を以て其同時代の名士たるフォンテーン氏に比する時は其才能に於て將た又性格に於て取る可き點多きを述べたり。皇帝は言ふ『彼は論外なり。彼は全く反動主義を以て基礎と爲せるなり。彼れは革命以前の社會より外、何物をも案出する能はず。革命前の時代が悉く彼の想像に形を表すのみにし

て、實際の事物に適用せらる可き知識を有せざるなり』彼は次で英國小説を捕へ來りて。リチャードソンやフイルジングに就きて譚り、更に伊太利及び西班牙の小説に就きて予に二三の質問を發し、終にはジール、ブラス(Histoire de Gil Blas de Santillane)やピゴール、ル、ブオオンの上にも及べり。彼が此種のものに通曉せるは頗る予の意外とする所なりと云ひしに、彼は『そは予が青年時代に多く此種のを讀過したるが爲なり。予は攻々として精勵すると共に又多數の小説をも耽讀せり。青年時代には今よりも遙に謹嚴なりき。予は第一回の伊太利遠征までは婦人の顔をも見んとはせざりき。予は敢て此に自贊を爲さんとするにはあらざれども、當時予は又法律の研究をも行ひたり。而して其後民法制定の業に當りし時國會は予が彼等の業に通達せるを知りて痛く不審の念に打れたり。予は彼等に談りて之れ予がそを研究せるが爲めなりと云へり』予は叫びぬ『噫、是れ實に大人

物を作る所以の道なり。彼等をして大ならしめたる所以のものはあらゆる方面に向つて其知識を求めたるが爲めなり。而して是等の知識が相結合して克く困難と闘へるが故なり。是れ實に彼の公達等に缺如せる所に、此度彼等をして斯くの如き紛糾錯雜せる難關に處すること能はざらしむるに至らしめたる所以なり』彼答へて曰く『寔に是れ今日の社會制度の病患なりと雖も、容易に治療すること能はざるなり。オルレアン公は佛國の公達中に在りて此試験に堪え得たる唯一人なり。其流寓の間に彼は貴公子たるを廢めて一個の平民と爲れり。斯くて即ち彼のみ獨り克く災厄の爲めに利得することを得たりしなり。是れ一般の評判なり』如何なる故にや彼は此問題に關する對話を中止せり。彼は新に斷えず伊太利民族の一國民と爲るを妨害しつつある法王に就きて談り出だせり。予は『一般民衆は初めパイアス七世に重望を懸けたるも、聽て彼は僧侶特有の頑冥執拗を有し、大人物の勇

氣を欠けることを暴露せり』と云ふ。然り、彼の剛毅なるは常に誇稱せらるゝ所なり。予は曾て彼を迫害するの態度を取りたることあり、彼は自ら予に向ひて彼は信仰に對する殉教者たり又たらんことを欲するものなりと聲明しぬ。然れども、予は之に答へて、何と云はるゝや、聖父よ、御身は美食を喰み、美衣を著け宮殿に住して、而して道の爲めに殉死すと呼ぶ、然も御身は生活を厭ひ給はざるなりと云へり。斯く談りて阿々と大笑せり。再び彼は佛國民を賞讃し全然國民的なる感情を以て佛國民を呼ぶに「予等」(nos autres)と呼べり。我等は大凡四十五分間歩み續けたり。最後の二周には彼はいたく身のほてるを覺へて帽子を脱せり。彼の額は汗に浴しつゝあり。終に彼は宮殿に向ひて歩を移し、相携へて彼の室に入れり。彼は予の如き卓越したる人物と知己と爲れるを喜ぶ旨を述べたり彼は予に向ひて低首して別を告げたり、斯くて予は退出せり。(未完)